

タイトル:平成 26(2014)年度 研究セミナー(第 15 回)

日程:平成 26 年 12 月 19 日(金)~21 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

小副川 琢 (AA 研 研究機関研究員)

本報告は、博士論文の作成とその後の出版という二本立てで行った。

論文作成に関しては最初に、博士課程在籍時の状況として、1999 年 9 月に英国のセント・アンドリュース(St Andrews)大学大学院国際関係学研究科に入学してから、2004 年 6 月に修了するまでの大まかな軌跡を話した。すなわち、1999 年 11 月に博士課程を正式にスタートするための審査があったことや、2001 年の夏に研究資金を獲得してレバノンで調査を行ったこと、折に触れて進捗状況に関する審査があったこと、などである。

次に、学位取得までの具体的な流れとして、1999 年 9 月から同年 12 月にかけては第 1 章(分析枠組み)に取り組み、2 週間ごとに各節(約 3000 語)を完成させて指導教官と面談したことに触れた。その後、2000 年 1 月から 2002 年 8 月にかけては第 2 章から第 4 章(本論の部分)に順次着手し、各節を完成させた後に指導教官と面談することを繰り返した。また、2002 年 9 月から 2003 年 5 月にかけては各章を完成させたら指導教官と面談し、2003 年 6 月から同年 10 月にかけては第 5 章(結論)を完成後に英文校正に出し、最後の確認として指導教官に通読してもらい手直しを行った。同年 10 月の論文提出後はいったん帰国し、翌(2004)年 2 月に渡航して口頭試問を受け、その結果を基にした若干の修正を同年 2 月から 4 月にかけて行った。

なお、論文作成に際しての留意点としては、英文のパラフレーズにとにかく苦労したが、でも書かないと進まないということを強調した。その他、まめにデータを保存することの必要性や、用語の統一に関しては一覧表を作っておくと便利なこと、口頭試問においては修正点を出来るだけメモすることが肝要、といったことに触れた。

博士論文の出版に関しては最初に、時系列的に話を進めた。博士号取得(2004 年 6 月)後から出版に向けた作業に着手したものの仕事に忙しく、ようやく 2007 年 4 月になってから国際関係理論に関する学術書を読み返すことが出来た状況であった。2009 年 2 月までこうしたことを行い、その後は論文の直しを本格的にスタートさせた。そして、2011 年 11 月にはある海外出版社に応募書類を最初に送付し、その後に依頼された草稿を送ったが、翌(2012)年 2 月にはその出版社からリジェクトの通知を受け取ることになった。かなりショックであったが、同年 4 月に再会したオランダ人のアドバイスもあり、同月にタウリス社(I.B.Tauris)へ応募書類を送付した。その結果、9 月には草稿を送付するに至り、12 月には査読後の指示に従って若干の手直しを行った。翌(2013)年はフォーマット調整や若干の英文校正を 1 月から 2 月にかけて行った後で、3 月から 8 月にかけて校正作業(初校から四校まで)に取り組み、10 月に出版することができた。

出版に際しての留意点としては、英文校正に納得できない時の対処法として、気軽に相談できるネイ

タイプの友人を持つことの重要性に触れた。また、出版社との関係に関しては、学術的価値と商品としての価値との折り合いをつける必要性が出てきた際に、指導教授のアドバイスが役立ったことに言及した。さらに、職場や単著以外の業績との折り合いを付けながら出版に向けた作業を進める必要性があることを指摘した。